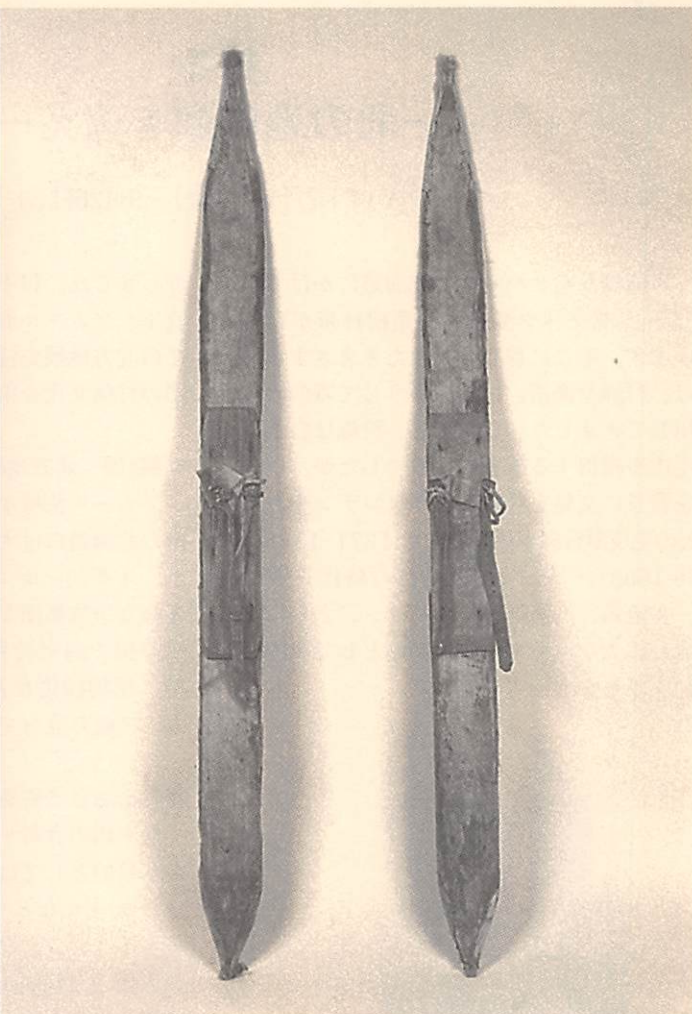




北方民族博物館だより
—47号—



H10.75 (上)
スキー (ウデヘ)
長さ 178.5cm

H9.262.9 (左)
水彩画 (ウデヘ) 縦 16.5cm 横9.1cm
ドゥンカイ・イワン・イヴァノビッチ作

特別展	狩る一北の地に獣を追え	2
講演会	北方地域の狩猟文化	5
講座	特別展「狩る一北の地に獣を追え」解説	6
	映画「デルス・ウザーラ」にみる狩猟文化	
表紙・記事・お知らせ		7
ニュース		8

狩る —北の地に獣を追え—

平成14年7月19日(金)ー9月26日(木)

アムール流域からサハリン、北海道にかけての地域には針広混交林や温帯性落葉樹林帯がひろがっています。そこに暮らしてきたさまざまな民族集団は、狩猟や漁撈、採集をつうじて森のめぐみを利用してきました。なかでも、狩猟は自家用の肉や毛皮を獲得する重要な手段でしたが、中国の需要を背景に交易を目的とするクロテンやカワウソなどの毛皮獣狩猟も活発で、元(1271-1368)・明(1368-1662)・清(1616-1912)の時代を通じてアムール流域、沿海地域、サハリン、さらに北海道を含む広大な地域が毛皮生産地として中国交易とのつながりをもっていました。



一方、日本の本州北部にも狩猟活動を行ってきた人びとが知られています。本州北部でブナやミズナラなどの森林に覆われた山岳地帯は、豊かな森林資源を背景に狩猟者が活動してきました。

こうした亜寒帯南縁から温帯北部に広がる森林地帯で営まれてきた狩猟は、北方における森林資源利用の典型的なあり方を示しています。



展示室の様子

本特別展ではアムール流域から本州北部にいたる地域の狩猟文化をつうじて森林資源の利用を紹介

しました。以下に展示の概要を紹介します。便宜上、アムール流域からサハリン、北海道にかけての北方地域先住民の狩猟文化を第1部、本州北部の狩猟文化を第2部として紹介します。

<第1部 北方地域の狩猟文化>

アムール流域から沿海地方、サハリン、さらに南の北海道にはナーナイ、ウデヘ、オロチ、ウリチ、ネギダール、ニブフ、ウイルタ、アイヌなど多様な民族集団が居住してきました。生業は、陸獣狩猟や海獣狩猟、サケ・マスを中心とした漁撈、植物採集などを季節的に組み合わせることによって成り立っています。

森林における狩猟対象動物と季節性

自家用の食料や生活物資の素材(衣類など)を得る目的としては、ヒグマ、シカ類、イノシシ、ライチョウなどを捕獲しました。クマは主に冬季、イノシシ、ライチョウは春から夏にかけて、シカ類は一年中が狩猟シーズンです。交易品として利用するために捕獲する動物にはキタリス、クロテン、カワウソなどの毛皮獣があります。これら毛皮獣の狩猟は、毛が良質の冬毛に変わる秋から冬にかけて行われました。

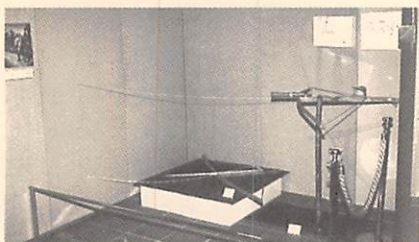
狩猟方法

槍・弓矢を使った狩猟(ウデヘの場合)

ロシア・沿海州のシホテ・アリニ山脈で狩猟を行ってきたウデヘは、19世紀後半以降に銃器が普及するまで、ヒグマやシカ類などの中・大型動物の狩猟には、槍や弓矢を用いていました。越冬間もないクマを狙う場合は、あらかじめ見当をつけていたクマの冬眠穴からクマをおびき出し、槍で突いて仕留めます。クマ猟の場合は弓矢を使うことはありません。クマは習性として立ち上がって前肢を上げた後、次は必ず上げた肢を下ろす動作をします。その瞬間に槍を立てかけるようにしてクマの胸部か脇の下の心臓部に槍を当てると、クマは槍に寄りかかるように倒れ込んできて自分の体重で槍が刺さります。シカ猟には水辺での追い

込み猟や、崖からの追い落とし猟、積雪期に行われる山での追い上げ猟などがあり、槍や弓矢の他、棍棒による撲殺や、鹿笛でシカを誘引して仕留める方法がありました。

ワナ猟



仕掛け弓

北方地域ではさまざまな形式のワナ猟が発達し、大型動物、小型動物を問わず使用されてきました。ワナは捕獲方法によって圧殺式のワナ（重量物を獲物の上に落下させて、圧死させる形式）、輪ワナ（括りワナ）、仕掛け弓の3種に大別されます。これらのワナは秋から冬にかけてけもの道に仕掛けるのが一般的です。特に毛皮の商品価値が最も高いとされるクロテンを捕獲するためのワナは種類が豊富で、北方の各地に類似した形式が見られます。

交易

中国やヨーロッパではクロテンの毛皮需要が高く、広く北方地域の民族集団から交易や朝貢によって、クロテンの毛皮を入手していました。毛皮交易や朝貢は元・明・清の時代を通じて行われ、数多くの毛皮が北京に送られました。

またロシアも16世紀にはヨーロッパの毛皮需要に応えるために毛皮を求めてアムール流域やサハリンに進出し、毛皮税の徴収や交易などにより毛皮を入手してきました。反対にこれらの地域には絹織物や銃器などの金属製品がもたらされました。

北海道においても、12世紀以降、サハリンや東北地方以南との交易が活発化してゆきます。北海道アイヌにとって、毛皮や熊胆と交換できる漆器類や鉄製品、ガラス玉や絹製品など、日本や大陸産の物資は生活に不可欠なものとなりました。

精神世界

狩猟、漁撈、採集を中心とした生業は農耕のように一定の土地を管理し、定期的な食料調達を期待できるものではなく、常に不安定な要素を含んでいます。そのため、人びとは自然や動物・植物に対する畏敬の念を共有していました。クマ送り

をはじめとする各種「送り儀礼」が行われ、また動物の体の一部を常時携帯したり、動物をかたどった木偶を作ることで動物から力をもらい、悪霊からも身を守ることができるとされてきました。

<第2部本州北部の狩猟文化>

かつて本州北部の狩猟者は、伐木・箕作・木地師・漆工・鉦山師・たたら・炭焼・修験者などの森林資源を利用して仕事をする漂泊の人びととともに一括して「山人」と称されてきました。彼らが山言葉や統率者を中心とする狩猟組織、狩りの作法や狩猟にかかわる信仰など、独特の狩猟習俗を伝承してきた狩猟者集団として認知されるのは、中世末から近世初頭にかけてであるとされています。その要因としては、山間部における農地の開拓に伴う鳥獣害の多発と鳥獣の肉あるいは漢方薬としての熊胆、毛皮などを換金しうる市場の活性化にありました。



展示室の様子

しかし、狩猟者は、狩猟によってのみ暮らしてきたわけではなく、狩猟は季節的、一時的なものでした。春から夏にかけての農耕、夏から秋にかけての漿果や堅果の採集と川魚漁、そして冬の狩猟というようにさまざまな生業を組み合わせで生活していました。狩猟の対象はニホンカモシカやツキノワグマなどの大型動物をはじめ、ノウサギやホンダヌキなどの小型動物、さらにヤマドリやキジなどの大型鳥類です。

狩猟方法

槍による集団狩猟

1月から2月の降雪期のカモシカ猟や、4月～5月上旬にかけてのクマ猟は槍を用いた巻き狩りで行われました。巻き狩りは獲物を追い出す勢子と射手の連携で行われ、統率者の指揮のもと、通常、勢子8～9名、射手3～5名が参加する大がかりな方法です。クマの巻き狩りの場合、まず、沢や斜面の下に配置された勢子が大声を出して、クマを射手が配置された尾根などの上部へ追い上げます。射手がクマに近づき大声をあげ、クマが前肢を上げて立ち上がると、すかさず、クマの喉元にある

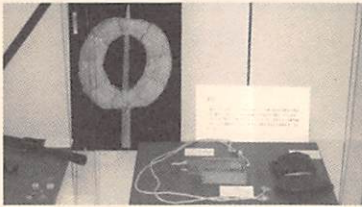
月の輪を狙って槍を突き出し、仮に一撃で仕留めることができない場合は、山刀をふりかざして相手の懐に飛び込むなどして仕留めました。

ワラダ・ワナ・鷹狩りによる単独狩猟

ワラダとは藁わらなどで作られた円盤状の道具で、ウサギ、ヤマドリ、キジなどの小型動物や大型鳥類を捕獲するための威嚇用道具です。

秋田地方のワラダは2~3cm幅で編んだ藁を5回位巻いて重ね合わせ、直径30cmくらいの円盤を作り、その円盤の中央に取っ手となる木片を串刺しにただけの簡単な道具です。このワラダを空中に投げるとタカが飛んでくるような音を出します。この音とワラダが回転しながら飛んでくる影によって、ワラダをタカの攻撃と勘違いしたヤマドリやキジは地上に伏せ、ウサギは手近な穴に逃げ込むのでそこを生け捕りにします。

ワナにはクマ用のクマトリバサミやテン用のテンバトリ、イタチ用のイタチトリなどがあります。これらはいずれも鉄製のバネ仕掛けで、踏み込んだ足を挟んで捕らえる挟み式のワナです。また、周囲に豊富に存在する植物を利用して作った圧殺式のワナやねワナも使われました。



ワラダと鷹狩りの道具

鷹狩りは「鷹匠」と呼ばれる狩猟者の狩猟方法です。鷹狩りは中国から伝来したとされ、中世の貴族や、戦国時代から江戸時代の武家に伝わりました。明治時代以降には、本州北部の狩猟者にも伝わりました。鷹狩りは明治時代から大正時代にかけて盛んにおこなわれましたが、小型動物しか捕獲対象にできないその生産性の低さから、その後は衰退してゆきました。

銃器の普及による狩猟形態の変化

15世紀末にヨーロッパで作られた火縄銃が日本に伝来したのは1543(天文3)年とされています。本州北部の狩猟者が火縄銃を使用するのは江戸時代からで、主に田畑での害獣駆除や巻き狩りに使用されました。以後、明治時代の前半まで、火縄銃と槍が巻き狩りににおいて併用されるようになります。銃の使用により狩猟技術が発達し、さらに火

縄銃が軽量で取り扱いやすい国産の雷管式銃(通常「村田銃」と呼ばれる)にとってかわられると狩猟技術はさらに発達し、単独で大型動物を狩猟する狩猟者も現れるようになりました。

獲物の分配

カモシカは肉、毛皮が自家用あるいは換金商品となり、クマの場合はとくに熊胆と毛皮が高価に取引されました。万能薬といわれる熊胆は、江戸時代には毛皮とともに奥州の特産品として価値の高いものとされ、藩に上納されました。明治以降においても熊胆とクマの毛皮の価値は高く、狩猟者にとっての貴重な現金収入となっていました。

集団で猟をした場合、獲物の肉も自家消費分として平等に分配されましたが、獲物が大量に捕れたときなどは仲買人に売って換金し、全員に分配しました。

狩猟に関する作法や信仰

本州北部の狩猟者には、山の神信仰や山言葉の使用、秘伝書の所持などさまざまな信仰や禁忌、行動規範が伝承されています。

山の神は狩猟者たちにとって山の領域の生き物を支配する神として崇められました。狩猟者は山の神が支配する山に入って狩猟をする事を許された人たちでしたが、不浄を嫌う山の神の機嫌を損ねないように行動する必要性がありました。山入りの際は普段は使わない山言葉と呼ばれる特別な言葉を使用し、日常生活から完全に隔離した作法を下山するまで守らなければなりません。また山の神公認の狩猟者としての証である「山立(達)由来記」、または「山立(達)根本之巻」など、普段は秘蔵している秘伝書を持参し、山の神に提示しなければなりません。

獲物を捕った時は、その毛や内臓・肉の一部を山の神に捧げて感謝の念を表し、さらなる恵みと安全を願いました。

謝辞

本特別展の開催にあたり、資料、写真、情報の提供につき、次の機関および個人にご協力いただきました。記して感謝申し上げます。

国立民族学博物館、碧祥寺博物館、資料館 ジャッカ・ドフニ、川井村北上山地民俗資料館、市立函館博物館、大槌町教育委員会、佐々木史郎氏、田口洋美氏

(学芸課 角 達之助)

北方地域の狩猟文化

講師 宮腰 實氏（柔道整復師／ハンター／
羅臼町のヒグマを考える会所属）
田口 洋美氏（狩猟文化研究所代表）

平成14年7月27日（土）13:45-16:30当館講堂

本講演会には、実際に現地で害獣駆除として狩猟活動を行っているハンターと、シベリア及び本州北部の狩猟者について調査を行っている研究者をお招きし、それぞれの立場からご講演いただきました。

以下に各講演の概要を報告します。

■ 宮腰 實氏
「ヒグマと私」

生まれ故郷の根室で、子どもの頃から狩猟に関わってきた。その時は小遣い稼ぎのためにウサギやシマリスをつかまえてその毛皮を売っていた。

1980年に羅臼に移り住んだ。この地で本格的にクマ撃ちを始めた。その頃はまだ春の予防駆除としてクマを撃つことができる時代でもあったが、今では害獣駆除としてしかクマを撃つことができなくなった。以来30年近く、役所から害獣駆除の要請があれば鉄砲打ちをやっている。



クマを撃ち殺すことに対して未だに抗議の電話を匿名でかけてくる人達がいる。その多くは都会に住んでいる人たちのようであり、彼らの言い分は「知床は大切な自然の宝庫だからクマを殺すな。殺すならおまえ達がそこから出て行け」という内容のものが大半である。私には「自分たちは便利な都会で生活し、たまに大自然に触れる機会が欲しい。私たちの希望を叶えるためにクマを殺すな」としか聞こえない。彼らにはクマの被害を受けた人たちの気持ちがわからないのだろうか？

「羅臼町のヒグマを考える会」のメンバーとアラスカを視察した折り、当地ではクマと人が共存できる方法を模索していることが分かった。羅臼町は世界で最もクマが棲息する密度が高いという。このことを誇りに思い、クマと人が共存できる環境をもっと真剣に考えるべきだ。

■ 田口 洋美氏

「北方の民族誌—その環境と技術をめぐって—」

「狩猟」について考える上で最も大事なことはそれが人間の生活のなかでどのように位置づけられているかということであろう。例えば日本の場合、農業を食料生産の根幹においている。農業は自然を破壊して従来野生動物たちの住处だった場所を切り拓いて田畑を作るところから始まるが、追い立てられた動物たちは餌えさを求めて耕作地に引き寄せられてくる。農民にとってこれらは害獣であり駆除の対象となる。そこに狩猟者が介在して、野生動物を害獣として扱い駆除することで生活を立てていくことができるわけである。つまり、農業と狩猟が共存できる構図が古くからあったといえる。

狩猟は大きくは自家消費のための狩猟と交易換金目的のための狩猟の二つに大別できるが、自家消費する目的のための狩猟がまず重要である。毛皮を中心とした交易や販売は自らが食べることができ、食料を貯蓄することができた後に行われるものである。このことは本州北部の狩猟者にのみあてはまる事例ではなく、毛皮交易を行っていたシベリアの民族集団にもあてはめることができる。狩猟、漁撈、採集を中心とした季節的な生業の組み合わせにより、多くの食料を得ることができたからこそ、クロテンなどの毛皮を中国やヨーロッパに供給することができたわけである。



(学芸課 角 達之助)

特別展「狩る 一北の地に獣を追え」解説

講師 角 達之助（当館学芸員）

平成14年8月11日（日）13:30-15:00当館講堂

第17回特別展の関連事業として、講座「狩る一北の地に獣を追え」を行い特別展の解説をしました。

以下にその概要を報告します。

アムール流域から本州北部にいたる地域では、森林資源を利用して狩猟活動が行われてきた。狩猟は自家消費のために必要な肉や脂肪、毛皮を得るための狩猟と交易、販売のための狩猟に大別できる。

アムール川流域からサハリン、北海道にかけての北方地域では、自家消費用としてヒグマやシカ類などの中・大型動物を捕獲し、交易品としてクロテン、キタリスなどの小型動物を捕獲した。交易品としての毛皮は13世紀以降19世紀半ばまでの中国や17世紀以降のロシアが主な取引先である。毛皮獣は、良質の冬毛に変わる秋から冬にかけて主にワナで捕獲し、毛皮に傷を付けないように工夫されていた。

本州北部の狩猟者も自家消費用としてクマやカモシカを捕獲し、市場の整備が整った江戸時代以降は熊胆や毛皮を換金商品として利用した。

アムール流域やサハリンに銃器が普及するのは19世紀後半以降、本州北部に普及するのは17世紀以降である。これ以後、追い込み猟や待ち伏せ猟、冬眠穴猟などによる中・大型動物の狩猟に際して、槍と併用して銃器が用いられるようになった。

銃器の使用により狩猟技術が発達し、捕獲が容易になっても自然界や動物に対する畏敬の念を持ち続けることに変化はなく、両地域の狩猟者ともに自然の恵みに感謝しながら森林資源を利用していた。

（学芸課 角 達之助）



「映画「デルス・ウザーラ」 に見る狩猟文化」

平成14年8月24日（土）13:30-16:15 当館講堂

第17回特別展の関連事業として、黒澤明監督作品「デルス・ウザーラ」を上映しました。

以下にその概要を報告します。

○主な登場人物

・デルス・ウザーラ

アムール川中流域、ウスリー川流域に住むナナイの民（映画では「ゴリド」（他称）と呼ばれる）。

・ウラジミール・アルセーニエフ

軍人であり探検家。1860年の北京条約によってロシア領となったウスリー川以東の土地を数回にわたって地勢調査をおこなう。

○探検の背景

・1858年 アイグン（愛琿）条約

ウスリー川以東から日本海に至るまでの土地がロシアと中国（清）の共有地となる。

・1860年 北京条約

ウスリー川以東から日本海に至るまでの土地がロシアの専有領土となる。

20世紀初頭になると、ロシア人にとって未知の世界であったウスリー川流域一帯の調査の必要性が高まり、アルセーニエフを隊長とする軍の調査部隊が調査に乗り出す。

○あらすじ

1906年、アルセーニエフを隊長とするロシア軍の地勢調査部隊は、ウスリー川以東の踏査の途中で、密林の中で狩猟をして暮らすデルス・ウザーラと出会い、彼を旅のガイドとして行動を共にし、隊の行動を大いに助けられる。ある日、隊を離れて行動したアルセーニエフとデルスは遭難するが、デルスの機転によって死を免れた。この事件の後、2人の友情が深まる。

数年後、再度この地を訪れたアルセーニエフは、デルスと再会し、再び行動を共にする。しかし、その頃のデルスは視力が衰えており、往時の鉄砲の名手としての面影はもはやなくなっていた。アルセーニエフは、デルスを説得し、ハバロフスクの自分の自宅に呼び寄せるが、都会の生活に馴染めないデルスは、再び森へと帰ろうとする。

（学芸課 角 達之助）

今号の表紙 — スキー —

シベリアからアムール流域、サハリンの民族集団にとって、冬季はヒグマやシカ類、イノシシなど大型・中型動物の主な狩猟期です。これらの動物は肉や毛皮の量も多いため、肉は食料に、毛皮は衣類や靴の素材となりました。

狩猟の際には狩猟具を持ち、毛皮製の衣類や靴を身につけ、雪上歩行具としてスキーまたはカンジキを履いて出かけました。今号の表紙は、ヤギの肢の毛皮が滑走面に貼られたウデへのスキーです。

ウデやその他の北方民族集団が積雪期の歩行具として使用するスキーは、多くの場合その滑走面に毛皮が貼られます。この毛皮は、スキーの進行方向に対して毛の向きが逆に貼られます。こうすることで斜面を上る場合には滑り止めとなり、下る場合にはより滑るように工夫されていました。

みんぞく こうこ はくぶつかん
in 北海道

このコーナーでは、当館の活動に関連する分野の新聞記事のうち、道外ではあまり紹介されていない情報を掲載します。

- 7/5(金) 十勝管内陸別町教育委員会はトマム地区の17世紀以前に築造されたユクエピラチャシ跡の発掘を開始/D
- 7/21(日) 国連の「先住民作業部会」に北海道ウタリ協会に所属する大学生4名が派遣される/Y
- 8/8(木) 千歳市埋蔵文化財センターが25年前に発見された道内最大級と見られる縄文時代後期(約3000年前)の石棒の調査を開始/Y
- 9/4(水) 北海道ウタリ協会静内支部はアイヌの海洋船「イタオマチ」を自ら復元、約8kmの航海に挑戦/D

※D：北海道新聞、Y：読売新聞、複数紙掲載の場合は扱いが大きい方を紹介しています。

講演会「アイヌ文化への展望」

北太平洋沿岸の先史文化、先住民文化についてアイヌ文化と対比しながら紹介します。(通訳あり)

- 日 時： 平成14年10月29日(火) 18:30-20:30
会 場： オホーツク・文化交流センター大会議室(網走市北2条西3丁目)
講 師： ウィリアム W. フィッツュー (スミソニアン研究機構)
チューネル M. タクサミ (ロシア科学アカデミー・人類学民族学博物館)

写真展 渡鴉(ワタリガラス)のアーチ

およそ100年前にW.ボゴラス、W.ヨヘルソンらが撮影した北東アジアにおける写真約20点および写真家星野道夫氏がアラスカとカムチャツカで近年撮影した写真約20点により、ベーリング海沿岸の人と自然を紹介します。

- 日 時： 平成14年11月1日(金)-11月14日(木)
会 場： 当館特別展示室

ミュージアム子どもフェスタ ～やってみる・モンゴル～

子どもたちを対象に、さまざまな体験の場を提供する催しです。

- 日 時： 平成14年11月3日(日) 9:30-16:30
会 場： 当館ロビー・講堂

- 9:30-11:00「親子で建てよう!モンゴルの「ゲル」」
モンゴルの家「ゲル」を組み立て、モンゴルの遊びを体験します。(定員20名)
- 11:00-15:00「フェルトを作ってみよう」
羊毛を材料に、フェルトでペーパーウエイトを作ります。※昼食の用意をしてください。(定員20名)
- 15:00-16:30「草原を渡る風—嵯峨治彦・馬頭琴と喉歌コンサート」
馬頭琴と喉歌の演奏会です。(定員80名)

■ 寄贈資料 (7-9月)

- ・網走市の林幸夫氏からマッコウジラ歯製パイプ1点が寄贈されました。
- ・常呂町の柳谷光男氏からジャコウジカ香囊ほか15点が寄贈されました。
- ・札幌市の納谷大宝氏から『蒙古草原』(米内山康夫著)1点が寄贈されました。

■ 執筆者・出版社から贈呈を受けた書籍等 (7-9月)

- ・スチュアート ヘンリ2002『民族幻想論—あいまいな民族つくられた人種』解放出版社
- ・ジパング倶楽部2002『ジパング倶楽部(8)』ジパング倶楽部
- ・池田昌信2002『ピアソン夫妻—北海道開拓時代の宣教師』ピアソン会
- ・『ピアソン夫妻とピアソン会活動』ピアソン会
- ・安東ウメ子・オキ2002『イフンケ』(CD)チカルスタジオ

■ 主な来館者 (7-9月)

7/27(土)

ユネスコ東アジア文化研究センター
調査外事室長 大井 剛氏
運営委員 藤井 和夫氏
大韓民国忠南大学校
教授 李康承氏

8/18(日)

北方島文化研究会

事務担当 佐藤 剛氏ほか10名

8/23(金)

奈良国立文化財研究所

調査員 中島 吉晴氏

中国社会科学院考古学研究所

副主任 李渺氏

研究員 李春林氏

研究員 安家瑤氏

9/18(水)

(財)アイヌ無形文化伝承保存会

事務局長 齋藤 詔司氏

事業部長 高橋 規氏

■ 行事案内 (11・12月)

11/2(土)講座「大草原の小さな
ゲル—現代モンゴルの多彩な
姿—」

12月下旬ロビーコンサート

■ その他の行事報告 (7-9月)

7/6(土)講座「ロシア極東経済と先住民の社会・経済」

8/10(土)博物館クラブ「北方民族の狩猟具作り」



北方民族の狩猟具作り

■ 観覧者動向 (7-9月)

	常設展示	特別展示
7月	2,820	673
8月	5,124	2,675
9月	3,808	1,553
計	11,752名	4,901名

■ 友の会会員募集中

北方民族博物館友の会会員を募集中です。友の会では季刊誌「Arctic Circle」や「友の会だより」をとおして北の文化を紹介しています。年会費は3000円です。すでに会員になられた方は、お知り合いの方にもご紹介下さい。詳しくはお問い合わせを。

■ 図録回収のお知らせ

第17回特別展「狩る—北の地に獣を追え—」の展示図録の一部を訂正いたしました。7月20日から7月30日の間に当館にて販売された分につきまして、無償にて改訂版とお取り替えしたく、誠に恐縮ですが購入された方は下記までご連絡下さい。

<連絡先>

〒093-0042

北海道網走市字潮見309番地1

北海道立北方民族博物館内

(財)北方文化振興協会

・電話 0152-45-3888

(9:00-17:30 休館日のぞく)

・FAX 0152-45-3889

(24時間受付)

・e-mail:

hoppohm@ohotuku26.or.jp

北方民族博物館だより
— 第 47 号 —
2002年10月10日発行

編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
TEL 0152-45-3888 FAX 0152-45-3889
e-mail: hoppohm@ohotuku26.or.jp
ホームページ: <http://www.ohotuku26.or.jp/hoppohm/>